

パーシャルデンチャーの設計についての提案

伊藤圭一（歯科技工士学科）

パーシャルデンチャーの設計は、①支持、②把持、③維持の順序で行うことが基本となる。これは義歯に加わる力の大きさの順に考えるということである。構成要素を金属でワンピースにて製作する金属床は、一般的なレジン床義歯に比べて強度と装着感に優れる。金属床の特長を考慮し、新たな設計を検討した。すなわち、支持、把持要素にはコバルトクロム合金、クラスプの維持腕には貴金属合金を用いる設計である。この他に、歯科用合金の特性について説明を行った。

認知症とMCI

阿志賀大和（専攻科保健言語学専攻）

ADNIと呼ばれるADの大規模臨床観察研究が行われており、そのデータの中のLogical MemoryにおけるMCIおよびADの基準を満たし、MMSEが24～26点で、CDRが0.5点の者を対象に、それらの被験者のFAQの値、t-tau/A β の値、FDG-PETの値を用いて、MCIとADに分類することが可能かを検討した。

その結果、FAQとFDG-PETの左AngularではMCIとADの間に統計学的に有意な差を認めたが、t-tau/A β とFDG-PETの右Angular、左右のTemporalについてはMCIとADの間に統計学的に有意な差は認めなかった。また、FAQのROC曲線下面積は0.8345であった。

以上から、ADNIのLogical Memory、MMSE、CDRの基準にFAQを追加することでMCIとADをより正確に分類可能となることが示唆された。

さらに、FAQは介助者に対する質問表であるため、症例の日常生活上の買い物や食事といった複雑な動作に着目することでADの早期に発見つながると考えられる。

第59回（通算第142回）：平成24年9月27日（木）

（座長：中澤孝敏）

本学学生の喫煙実態と禁煙支援のあり方の検討

本間和代（歯科衛生士学科）

昨今、喫煙による健康への影響がクローズアップされ、国民の禁煙意識は高まってきたが、若者の喫煙率は低下傾向にない。本学では入学と同時に専門医を招聘し、禁煙教育を行うと同時に、歯科衛生士学科においては、歯科衛生士業務で患者の禁煙支援を行うことが求められる時代となり、その教育も行われるようになった。そこで、学生の喫煙実態を把握し今後の禁煙教育の在り方を検討することを目的に、平成24年7月にアンケートを実施した。対象は、歯科技工士学科および歯科衛生士学科学生251人（男34人、女217人）である。

その結果、喫煙者は23人（9.2%）、過去喫煙者は6人（2.4%）で、保護者の約半数は子供の喫煙を知らなかった。喫煙者・過去喫煙者の81%は、気分転換や人の勧め、好奇心などの動機で、中学・高校時代に喫煙を始めていた。また、1日の喫煙本数は6～10本が52%と最も多く、食後や放課後の比較的にリラックスできる時間帯に多く喫煙していることが分った。しかし、喫煙者の87%は過去に禁煙を試みたが失敗して現在に至っている。以上より、本学入学以前に喫煙を開始している者が多く、簡単に禁煙に導くのは困難であることが伺えるが、喫煙が健康に悪いことを自覚し、できれば止めたいと思っている学生が多いことから、医療従事者をを目指す学生の健康を考え、禁煙支援のための大学としての継続的支援体制の確立と、本学入学後に喫煙を開始する者を出さないための取組みが急務であると考えられる。

本学附属歯科診療所歯科技工室における感染対策の現状と改善に向けて

榎並拓也（附属歯科診療所DT）

青柳洋平（沖歯科工業）

飛田 滋（歯科技工室長、歯科技工士学科）

現在、医科の世界では感染予防対策としてスタンダードプレコーションの概念が普及している。しかし、日本の一般歯科診療の現場ではスタンダードプレコーションの徹底は難しい側面を抱えている。唯一「日本補綴歯科学会指針」なる感染対策ガイドラインがあるだけである。そこで本学の診療所と歯科技工室の実態をこのガイドラインに照合し問題点と

改善点について検討を行った。その結果、歯科技工室は①診療エリアと技工エリア間を往来する搬送物の消毒の徹底化②歯科医療チームの一員として自覚を持つ③歯科技工の作業環境は常に整備する④歯科技工の感染対策は確実・安全・簡便・安価が重要⑤全歯科技工士のB型肝炎ワクチン接種の義務化、以上の5点にまとめられた。今後は早急に感染予防対策の概念と対処法を歯科技工基礎教育に導入することが必須であると考え、忘れてならないことは、歯科技工士が歯科医療従事者であり自ら身を守る姿勢を持つことである。

第60回（通算第143回）：平成24年10月25日（木）

（座長：丸山 満）

歯科衛生士学科1・2年生における『早期臨床体験実習』の取組み

天池千嘉子（歯科衛生士学科）

本学歯科衛生士学科では歯科医療現場、歯科衛生士の役割を早期に理解し、その後の学習意欲を高めることを目的に入学して間もない時期から、早期臨床体験実習を行ってきた。早期臨床体験実習は1985年に医学教育において早期に医学生に学習への動機づけを目標に導入されており、これを受け、看護師や歯科衛生士など医療職の養成機関においても取り組みが始まった。本学では、一般目標、到達目標を掲げ、1年前期・後期、2年前期の3回に分けて行い、学生に自己評価をさせた。その結果、身だしなみや、患者への気配りの自己評価は高く、自分で考えたり、行動する自己評価は低かった。また感想では「歯科衛生士の仕事に興味をもった」、「教えてもらうことに甘えていたが、自分から考えるようにしなければ行けないと思った。」「他学年との実習はお互いの刺激となってよかった。」と歯科衛生士を目指す学生の自覚をもち始めたように思われる。今後早期臨床体験実習の有効性を検証しながら取り組んで行きたい。

東伸洋行（株）新商品の紹介 ～ノンクラスプ義歯への利用について～

山本土郎（東伸洋行株式会社）

H20年から明倫短期大学・沖歯科工業（株）・東伸洋行（株）の3者による連携で開始した『レイニ

ング樹脂によるノンクラスプ義歯に関する共同研究』は昨年度までに20症例の研究対象で義歯製作を完了し共同研究を終了した。材料の開発、改善をテーマとした東伸洋行（株）では、樹脂材料の改良版となるレイニング樹脂NをH22年9月に発売開始し、義歯の耐久性を飛躍的に向上させることができた。また本年度は関連商品として1. 高膨張タイプの石膏「レイニングストーンHE」：レイニング樹脂Nの収縮率に合わせ0.6%の膨張率とすることで義歯の適合性を向上する。2. 石膏型鏡面仕上剤「ベースコートDC」：石膏面に塗布し鏡面に仕上ることにより、義歯の研磨作業を低減し、また石膏型との分離機能を持つ。3. 歯科技工用成形器「セレクトミニ」：小型低価格の新型射出成形器で全ての熱可塑性樹脂に対応する。以上3点を新商品として販売開始したので、ノンクラスプ義歯への利用法を含めて製品を紹介した。

ノンメタルクラスプ義歯の短期的評価 ー歯科医師の立場からー

野村章子（歯科技工士学科）

本学附属歯科診療所において平成18年から平成24年までレイニング樹脂およびレイニング樹脂N（東伸洋行）を使用して製作したノンメタルクラスプ義歯38ケースの概要について報告した。欠損分類では、前歯中間4、臼歯中間7、片側遊離端20、両側遊離端3、複合4ケースであった。部分床義歯の設計原則である安定性、清掃性、耐久性を確実にするために歯科技工士との設計検討を重視した結果、多くのケースにおいて問題点は認められず、再製作を要した2ケースについては多数歯の複合欠損症例における射出成形時の寸法変形および患者の装用ミスによるものであった。

義歯設計に創意工夫をこらした種々の症例の中から、高度の咬耗と緊密咬合を呈する下顎大臼歯部の片側遊離端欠損、隣在歯との審美的調和と発音機能を重視した上顎前歯部欠損、支台歯2歯と欠損歯4歯のアンバランスが危惧された上顎臼歯部の片側遊離端欠損、長年装用した上顎コースス・テレスコープ義歯と下顎金属床義歯から転換した臼歯部欠損の計4症例を選び、治療ポイントを詳しく解説した。さらに、義歯内面調整および患者による義歯着脱の注意点、米菓咀嚼の食片無介入についても述べた。